

自然会話における終助詞「かな」の用法

平山紫帆 (立教大学)

The usage of sentence ending “kana” in natural conversations

Shiho HIRAYAMA (Rikkyo University)

キーワード： かな, 自然会話, コミュニケーション, 疑い, 相手への配慮

Keywords : kana, natural conversations, communication, doubt, consideration for others

SUMMARY

This paper focuses on the sentence ending particle, “kana” in natural conversations and analyzes how it is used in actual communication. As a result, it was revealed that in terms of frequency it is often used with the function to “express ‘doubt’”. In addition, it would found that with regards to the method of use, it not only indicates that a “decision is not established”, but “kana” is also used to show consideration for others by softening the speech.

1. はじめに

終助詞は、文の末尾にあつて、その文が表す意味内容に対する話者の判定の仕方や、聞き手への伝達態度を表す。そのため、終助詞は円滑なコミュニケーションを行う上で、極めて重要な役割を果たす。しかし、日本語学習者にとって、その使い分けは難しく、日本語の習得段階にかかわらず、終助詞を適切に使用できない学習者も多い。学習者が適切に使えるようになるためには、助詞そのものの意味だけではなく、実際のコミュニケーションの中で、どのように使えばいいのか、その運用面における具体的な使用方法を提示することが効果的だと思われる。そのために、まずは終助詞の基礎研究の充実が求められるが、終助詞の研究は、「ね」「よ」に関しては研究が進んでいるものの、そのほかの終助詞の研究は未だ十分になされていない(白岩, 2011)。

そこで本稿では、自然会話における終助詞「かな」に注目し、その使用状況やコミュニケーションにおける用法について明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

「かな」に関する研究には、「かな」を終助詞「か」+終助詞「な」の組み合わせとして捉える立場(池田, 2011; 三宅, 2000)と、「かな」をひとまとまりのもののみ

なし、その特徴を考える立場（仁田, 1991; 宮崎, 2002）がある。

このうち前者に属する三宅(2000)は、終助詞「ね」が「当該命題の妥当性を計算中であるという標識」とする田窪・金水(1996)の分析を援用し、「かな」の本質的な意味を「疑問内容を検討中であることの表明」と定義づけている。

一方、たとえばモダリティの研究の中で「かな」を扱う場合には、「かな」はひとまとまりの表現とみなされる。そこでは、「かな」は「疑い」を表す形式とされることが多い（仁田, 1991; 宮崎, 2005 等）。「疑い」とは、本来の「質問」には備わっている、①不確定性条件（話し手には何らかの情報が欠けているために、判断が成立していないという条件）と②問いかけ性条件（話し手は聞き手に問いかけることによって、その情報を埋めようとするという条件）のうち、②の問いかけ性条件を欠くものであり（宮崎, 2002）、したがって、「疑い」は話し手にとって不明の点があることだけを表し、聞き手に問いかける機能を持たない（日本語記述文法研究会, 2003）とされる。宮崎（2002）は、「かな」をそのような「疑いを表す形式」として位置付け、「疑い」の文の特徴を考察する中で、「かな」を扱っている。

この「疑い」としての観点を持ちつつも、「かな」自体により焦点を当てた研究には熊野(1999)、熊井（2014）がある。このうち熊野(1999)は、仁田(1991)に基づき「かね」と「かな」の表現類型を分類し、それぞれの類型ごとに分析を行っている。

こうした表現類型や機能による分類は、「かな」の特徴を理解し、整理する上で有益だと思われるが、実際のコミュニケーションで使えるようになるには、「かな」が本来持つ意味・機能、すなわち「内在的意味」（益岡, 1991）とは別に、コミュニケーションにおける具体的な表現効果に関する知識も必要であると言えよう。しかし、こうした視点を持つ研究は、ポライトネスの観点から「かな」の考察を行っている熊井（2014）にわずかに見られるものの、管見の限り、ほとんどなされていない。

さらに、「かな」をめぐる研究では、用例が示されていることが多いが、その大半が新聞や小説等の抜粋や作例を使用している。前述の熊井(2014)の資料も小説であった。しかし、宇佐美（2012）が強調しているように、自然な会話と作られた用例はかなり異なるため、小説等からの用例だけでは、実際の会話での使用状況を把握することはできない。自然な日本語コミュニケーションの実態を捉えるためには、やはり自然な会話を題材とする必要がある。

3. 研究課題

以上の先行研究からは、①分類はされていても、どれがよく用いられるのか等の使用状況が明らかでない②実際のコミュニケーションにおける、表現効果を含めた使用方法が明らかでない、という問題点が挙げられる。したがって、本稿では、以下の2点を研究課題に設定する。

研究課題1：「かな」の各用法が自然会話の中でどの程度使用されているかを明らかにする。

研究課題2：「かな」のコミュニケーション上の表現効果や使用方法を明らかにする。

4. 分析

4.1 使用データ

本稿では、「BTSJによる日本語話し言葉コーパス（2011年度版）」（宇佐美 2011）で提供されている、10代後半～20代中盤の日本人大学生の2者間会話をデータとして用いた。各会話は親しい同性の友人同士の会話で、データ数は、男性10組、女性9組の計19会話である。

表1 会話データの詳細

| | 男性 | 女性 |
|----|---------------|-----------------------|
| 人数 | 20名 (M01～M20) | 18名 (F01、F02、F03～F20) |
| 関係 | 親しい友人 | 親しい友人 |

4.2 分析方法

まず、課題1を明らかにするために、「かな」の会話データから終助詞の「かな」を抽出し、仁田(1991)、熊野(1999)の分類に基づいて(表2¹⁾、「かな」の表現類型についてコーディングを行い、それぞれの出現回数をカウントした。

表2 「かな」の分類

| 表現類型 | 下位分類 | 例 |
|-------------------|---------|----------------|
| 働きかけ | 依頼 | それ持ってきてもらえないかな |
| 表出 | 意志の表出 | 私はコーヒーにしようかな |
| | 願望の表出 | あした天気にならないかな |
| 述べ立て ² | 疑いの述べ立て | あの人独身かな |
| 問いかけ | 判断の問いかけ | こういう書き方でいいかな |

(熊野(1999)より抜粋)

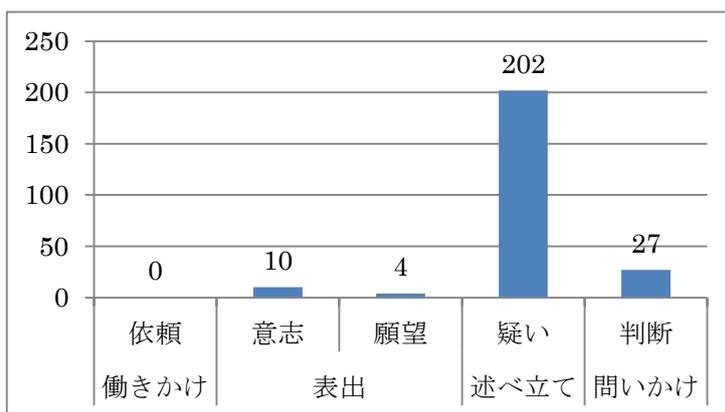
次に、データに表れた「かな」を表現類型ごとに質的に観察した。具体的には、どのような場面・状況で「かな」が使用され、その結果、どのようなコミュニケーション機能を果たしているのかについて分析を行った。

4. 結果と考察

4.1 「かな」の表現類型別出現頻度

今回の会話データから抽出した「かな」は、全243であった。その表現類型ごとの出現数を図1に示す。

図1 「かな」の表現類型別出現数



今回のデータで得られた全 243 の「かな」のうち、圧倒的に多かったのは「疑いの述べ立て」の「かな」であり、202 例に上った。宮崎(2002)は「かな」を「疑いを表す形式」だとしているが、「疑い」を述べ立てることが「かな」の中心的な用法であることが、使用数の点からも明らかになったと言える。

4.2 「かな」の使用方法

4.2.1 働きかけ（依頼）

熊野（1999）では、「それ持ってきてもらえないかな」という依頼の「かな」の用法が挙げられていたが、今回のデータにはそうした用法は出現しなかった。それは、本研究で扱った談話のタイプが雑談であったため、会話参加者が依頼を行う状況になりにくかったということが原因にあるかもしれない。

4.2.2 表出（意志）

意志の表出としての「かな」は、10 例見られた。ここに分類される「かな」は「～ようかな」の形、すなわち「意志の疑問表現」（宮崎, 2002）を取るものであるが、得られた 10 例は、同じ形式でありながら、その用法には違いが見られる。

①未確定の自分の行為について述べる

まず一つは、将来の行動について、それをする意志は多少あるが、実際にするかどうかわからないで、判断が不成立であることを表す「かな」である。これは、宮崎（2002）が「話し手が自らの意志をそのように決定することについての、話し手の迷い・疑いを表した文」としたものである。

例 1³ （F14 の卒論のテーマの話）

| ライン番号 | 話者 | 発話内容 |
|-------|-----|--|
| 243 | F14 | <分かんない>{>}状況にいるから、一応いま本読んで一、で、服装一を変えるってことはさ一(うん)、なんだ[↑]、その一応日常生活 |

| | | |
|-----|-----|--|
| | | でやったらー(うん)、ちょっと、みんなビックリするじゃん。 |
| 244 | F13 | うん=。 |
| 245 | F14 | =その、理由っていうのは、服装自体がもう既に性別を表してるからでー(うん)、でー、例えば服装でほんとに女の子らしく(うん)見えたらー、もしかしたら、男の子でそういう人が好きだったら好きになるかもしれないしー。 |
| 246 | F13 | うんうん、はいはいはい。 |
| 247 | F14 | っていうくらい見かけが重要でー(うん)、それを逆にしている、ときの(うん)、その相手の反応、とかを(うん)聞いてみようかなと思って。 |

②相手に影響を及ぼす自分の行為について述べる

例2 (話題の指示カード(「こんな機会だから言える普段相手に対して抱いている印象」)を見て。)

| ライン番号 | 話者 | 発話内容 |
|-------|-----|----------------------|
| 276 | M20 |]] <こんな>{>}話しねーつつーの。 |
| 277 | M19 | じゃあ、こんな機会だからー。 |
| 278 | M20 | こんな機会だから<笑いながら>。 |
| 279 | M20 | <こ>{<},, |
| 280 | M19 | <言>{>}おうかなー。 |

この例では、相手への印象を話すことが求められた M19 が、「かな」を用いて、それを話すという意思表示を行っている。①との違いは、その行為をすることの確定度の高さである。この例では、相手への印象を話さないという選択肢も残されているものの、指示カードに書かれていることであるため、相手の印象について話すことの確定度が高いと言える。このような場面での「かな」は、「将来の行動を行うか決めていない」という意味合いは少ないように思われる。

では、なぜ「かな」を使って意思表示がなされているのだろうか。それは、対話者の反応が影響しているようである。この例を見てみると、M20 はライン 276 で普段相手への印象を話すというようなことをしないと述べている。そうした状況で自分が相手の印象を話すということは、相手にも同様に印象を話すことを求めることにもつながる事態であると言える。M19 が「かな」を用いたのは、相手に配慮し、直接的な意思表示を避けるためだと捉えることができるのではないだろうか。意思表示の「かな」には、こうした「相手への配慮」を示す用法がある。

4.2.3 表出（願望）

願望の表出としての「かな」は4例にとどまった。

①自分の願望を表現する。

自分でコントロールができない事態について願望を述べる際に、「かな」が用いられる。

例3（サークルの話）

| ライン番号 | 話者 | 発話内容 |
|-------|-----|---------------------------|
| 512 | M19 |]] <あれ、いつ代わる>{>}んだっけ?、代は。 |
| 513 | M20 | 11月いっぱいらしいけどね。 |
| 514 | M19 | <あ>{<},, |
| 515 | M20 | <早>{>}くおわんねー<かな>{<}。 |

②相手の立場で願望を述べ、共感を示す

例4（F12が、お菓子を送ってこないように、実家に頼んだという話題）

| ライン番号 | 話者 | 発話内容 |
|-------|-----|---|
| 504 | F12 | もう、ほんと、米、米と味噌としょうゆだけで充分(<笑い>)。 |
| 505 | F12 | ほんといりません、あとはつつて。 |
| 506 | F11 | [手を叩きながら]健康的な生活なんだ(うん)、米と味噌としょうゆ<笑いながら>。 |
| 507 | F12 | とか、言いながらも何か、荷物来ると何か入ってることを期待してるんだよね、絶対ね<笑いながら>。 |
| 508 | F11 | なんか、入ってないかなーって。 |

この例において、お菓子を断りながらもお菓子を期待してしまうのはF12であるが、F11はF12の立場に立ち、F12の願望を「かな」を用いて具体的に表現している。それにより、F11はF12に共感を示していると解釈できるが、話者に寄り添って願望を表出することで、話者への共感を強く表すことができる。

4.2.4 述べ立て（疑い）

今回のデータでは、「疑いの述べ立て」としての「かな」が202例観察された。

①記憶が曖昧なことを話す

記憶が曖昧なために、判断が未成立である状態を示す。これは、熊井(2014)で「記憶を辿りながら話すとき」とされた「かね」の用法に共通する。

例5 (自分に届いた携帯メールについての話題)

| ライン番号 | 話者 | 発話内容 |
|-------|-----|---|
| 265 | F07 | でさー、あの日、<軽く笑う>何て入ってきた[携帯のメール]、あー、消したかな。 |

②判断がつかないことを示す

自分に関する事柄であっても、決断をしていないことであったり、自分の評価に自信がない場合などには、「かな」が用いられる。例6は自分の判断に対する「疑い」を述べた例である。

例6 (話題指示カードに従って話すのが難しい、という話題)

| ライン番号 | 話者 | 発話内容 |
|-------|-----|--------------------------|
| 86 | F14 | こーれー、全然進まないね<笑いながら>。 |
| 87 | F13 | 「F14 あだ名」てさー、とか言えばいいのかな、 |
| 88 | F14 | そうそう。 |

③相手や第3者に関する、自信のない判断や認識を述べる

相手に関わる事態や思考、第3者や一般的な事柄に関することについて、断定をするほどの情報や自信がない場合に、「かな」が用いられる。これは熊井(2014)では「話し手の推理や認識を伝える」とされたものにあたる。

例7 (M11の家庭の育ちの良さ)

| ライン番号 | 話者 | 発話内容 |
|-------|-----|---|
| 597 | M12 | 「M11 あだ名」、なんか、あれだよ、でもー、印象としてはやっぱりー、あの一、なんだろうなー、育ちがいいという印象は、なんに、い、教育がすごくよかったのかなって。 |
| 598 | M11 | おれはねー、でも、あんまりそういう風には見られ、見て欲しくないね。 |

M12が話題にしているのは、M11が育ちの良さについてである。この場合、実際にM11の家庭の教育が良かったかどうかはM12には判断がつかない。したがって、判断が成立しないことを表す「かな」が用いられている。

以上、①～③の例は「判断が未成立」であることを表す用法であった。これに対し、以下の例のように、「判断が未成立」とはあまり感じられない場合にも、「かな」は用いられる。

④相手と異なる主張を行う際に、自分の発話を和らげる

例 8 (お酒に関する話題)

| ライン番号 | 話者 | 発話内容 |
|-------|-----|----------------------|
| 675 | M10 | でも、焼酎がいいんだよ、『いいちこ』が。 |
| 676 | M09 | まーね。 |
| 677 | M09 | 最初は一、でも、やっぱビールかな。 |

M09 は、M10 の好みに関する主張を聞いたあとに、それと一致しない自分の好みについて話しているが、この場合に「かな」が用いられたのは、自分の好みの判断がつかないからではなく、相手に対する自分の主張を和らげためであると考えられる。この「かな」は、「意志の表出」で相手を慮って「かな」を用いた例と共通する使用法だと言える。

⑤相手への批判を和らげる

以下の例のように、相手を批判する発話において、「かな」の使用が認められた。

例 9 (F14 の性格の話)

| ライン番号 | 話者 | 発話内容 |
|-------|-----|--|
| 90 | F14 | <え、>{>} 「F13 あだ名」ちゃんて前から思ってたんだけどー<2 人笑い>[↑]。 |
| 91 | F13 | え、何かさー、そうやって無理やりに話し出しているのかな?。 |
| 92 | F13 | それなら、なんか多少はって(あー)感じなんだけどー。 |
| 93 | F14 | <笑い>何だろうねー。 |
| 94 | F13 | 何だろうねー。 |
| 95 | F14 | [咳払い]。 |
| 96 | F13 | うん、「F14 あだ名」ーは、ゴーイング・マイ・ウェイって感じかな。 |

相手を批判するということは、相手のネガティブフェイスを脅かし、円滑なコミュニケーションを行う上で、大きな障害となる。そこで、相手を批判する際に「判断が未成立」であることを表す「かな」が用い、その批判をも未成立のものとして表現しているのではないだろうか。

⑥相手への不同意を間接的に示す

例10 (F13の性格の話)

| ライン番号 | 話者 | 発話内容 |
|-------|-----|--------------------------|
| 97 | F14 | <笑い><「F13 あだ名」ちゃんは>{<},, |
| 98 | F13 | <まー、そこが>{>}。 |
| 99 | F14 | しっかりマイ・ウェイって感じかな。 |
| 100 | F13 | えー、ほんとにー?。 |
| 101 | F14 | うん。 |
| 102 | F13 | そうかなー。 |

ここで「かな」は、相手の発言内容を受けた「そう」に続いている。この「そうかな」は、「かな」がつくことによって、相手の発言が信じられない、同意できないといった「不信」を表している。この「かな」は、相手を直接批判するのではなく、間接的に不同意を示すことによって、相手への批判を和らげているのだと解釈できる。なお、このタイプの「かな」については、「かな」だけを相槌として用いる場合もある。

例11 (F09は、会話録音の目的が、会話の内容の研究だと推測している)

| ライン番号 | 話者 | 発話内容 |
|-------|-----|--|
| 392 | F10 | だってさー、別に話し逸れてもいいってこう。 |
| 393 | F09 | まー、そうだけどさー,, |
| 394 | F10 | 困った、見なくてもいいとか言ってなかったっけ?。 |
| 395 | F09 | ま、そうだけど、でもさー、一番とりやすすくない?、こういう風に日本人はこう突きつけられたときに,, |
| 396 | F10 | え、えー[慌てた感じ]。 |
| 397 | F10 | えー、これ単になんかさー、話の、なんだろう、よくわかんないけど、間‘ま’とか普通に、内容関係ないのかと思ってた。 |
| 398 | F09 | かなー。 |

4.2.5 判断の問いかけ

疑いの文は、判断が未成立のまま発話がなされる場合に使用され、本質的には聞き手に問いかける機能を持たないため（日本語記述文法研究会, 2003）、独話的用法が基本とされるが、それを拡大させた対話的機能も存在する（宮崎, 2002）。問いかけは、そうした対話的機能の一つである。今回のデータで確認できた問いかけの「かな」は、27例であったが、その使用法としては、以下のものが観察できた。

① 相手が判断できるか不明なことについて、問いかける

相手が質問に答えるだけの情報を持っているか不明な場合に、「かな」を用いた問

いかけがなされる。これは、「相手が答えられないかもしれない情報について相手に答えを強制せず、疑問を相手と共有しようとする表現」（熊井，2014: 18）であり、相手に「質問に答えない」という選択を許す発話でもある。

例 12（知人の研究のテーマの話）

| ライン番号 | 話者 | 発話内容 |
|-------|-----|-------------------------------|
| 345 | M16 | 何やるんだろうね?、あの子は。 |
| 346 | M15 | 水戸学でしょ?。 |
| 347 | M16 | あ、そっか、水戸学だ。 |
| 348 | M15 | うん。 |
| 349 | M16 | うー<ん>{<}。 |
| 350 | M15 | <え>{>}、でも「大学名 1」でできんのかな?。 |
| 351 | M16 | でも、「人名 8」先生とかはそっち系なのかな?、そっち…。 |
| 352 | M16 | 水戸学ってなんか、要するに、儒学とかを,, |
| 353 | M15 | だよ<ねー、うーん>{<}。 |
| 354 | M16 | <取り入れて>{>}とかでしょ。 |
| 355 | M16 | だから、関係あるんじゃないの?、まあ。 |

この例では、M16 は、水戸学が大学で研究できるかを尋ねているが、「できる?」等の直接的な質問の形はとらず、「かな」を使用している。それは、相手が質問に答えられないという想定ができないためであると考えられる。

②自分の判断に自信がないことについて、相手に確認を求める

これらの例は、話者自身が判断しようとするが、その判断に自信がない場合に、後押しを求めるというものである。

例 13（話題指示カードのせいで会話がとぎれがちになっている）

| ライン番号 | 話者 | 発話内容 |
|-------|-----|---|
| 212 | M15 | 《沈黙 2 秒》なんかある?。 |
| 213 | M16 | 《沈黙 5 秒》これ、逆にこれのせいでなんか(うん)、会話が、なくなりかけだから、やめた方がいいのかな?。 |
| 214 | M15 | あー、でも、おれも言っという方が<いい…>{<}。 |

上記の例では、M16 は話題指示カードの話題が話しにくいいため、指示通りの会話をすることをやめたがっている。やめた方がいいという判断の適切さを確認するため、「かな」が用いられている。

5. 結論と今後の課題

以上の結果から本稿の課題への答えをまとめると、以下のようになる。

課題1：「疑い」の形式とされる「かな」は、自然会話において、「疑いの述べ立て」をする際に最も多く使用されている。

課題2：自然会話においては、実際に判断が不成立である場合の「かな」のほか、相手と異なる主張や相手への批判を行ったり、相手に同意できない場合に発話を和らげるために「かな」が用いられている。

こうした相手に配慮を示す用法は、円滑なコミュニケーションを行う上では、極めて重要だと言える。だが、こうした運用面に関わる用法は、従来、あまり関心が払われてこなかった。本稿で、実際の会話でそうした用法が使用されていることを示せたことは、一定の意義があると思われる。

本稿で扱った会話は、10代後半～20代中盤の同世代同士の雑談であった。他の年齢層や雑談以外の状況での使用状況を明らかにすること、また、日本語教育に活かす方法を探ることが今後の課題である。

¹ 熊野(1999)の調査で使用が認められなかった「命令、勧め、誘い、納得、情意」を表す「かな」については、今回のコーディング項目に含まなかった。

² 「述べ立て」とは、「話し手の視覚や聴覚などを通して捉えられた世界を言語表下にして述べたり、ある事柄についての話し手の解説・判断への疑念を述べるといった発話・伝達的態度を表したもの」(仁田, 1991, p.34)である。

³ 本稿の例で用いた記号は以下の通りである。(宇佐美 2007 による)

- 。 1 発話文が終了したことを示す。
- ?。 質問や確認の発話文が終了したことを示す。
- = = 改行される発話と発話の間が、当該の会話の平均的な間の長さよりも相対的に短いか、間が全くないことを示す。
- < > {<} < > で囲まれた部分が、他者に発話を重ねられた部分であることを示す。
- < > {>} < > で囲まれた部分が、発話を重ねた部分であることを示す。
- () 相手の発話に重なる、短く、特別な意味を持たないあいづちを示す。
- < > 笑いながら発話したものや笑い等の説明を記す。
- 「」 話者のプライバシーにかかわる固有名詞等であることを示す。

参考文献

- 池田英喜 (2011). 「終助詞『ヨ・ネ・ナ・カ』の組み合わせ—出現頻度から考える—」. 『新潟大学国際センター紀要』 7, 12-19.
- 宇佐美まゆみ (2007). 「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 2007年3月31日改訂版」. 『談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作』 平成15-18年度 科学研究費補助金 基盤研究B(2) (研究代表者 宇佐美まゆみ) 研究成果報告書.
- 宇佐美まゆみ (2012). 「母語話者には意識できない日本語会話のコミュニケーション」. 野田尚史(編) 『日本語教育のためのコミュニケーション研究』 63-82. 東京：くろしお出版.
- 熊井浩子 (2014). 「文末表現「カネ」の用法について—Politenessの視点から—」. 『静岡大学国際交流センター紀要』 8, 1-27
- 熊野七絵 (1999). 「文末の『かね』の意味・機能—「疑いの表現」としての位置づけ—」. 『広島大学留学生センター紀要』 10, 31-41.
- 白岩広行 (2011). 「第二言語としての日本語の終助詞習得研究の展望」. 『阪大社会言語学研究ノート』 9, 66-95.
- 仁田義雄 (1991). 『日本語のモダリティと人称』. 東京：ひつじ書房.
- 日本語記述文法研究会 (編) (2003). 『現代日本語文法4 第8部 モダリティ』. 東京：くろしお出版
- 益岡隆志 (1991). 『モダリティの文法』. 東京：くろしお出版.
- 三宅知宏 (2000). 「疑念表明の表現について—カナ・カシラを中心に—」. 『鶴見大学紀要 第1部 国語国文学編』 37, 8-21.
- 宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃 (2002) 『モダリティ』 新日本語文法選書 4. 東京：くろしお出版.

(資料)

- 宇佐美まゆみ監修 (2011). 「BTSJによる日本語話し言葉コーパス (2011年版)」『人間の相互作用研究のための多言語会話コーパスの構築とその語用論的分析方法の開発』平成 20-22 年度科学研究費補助金基盤研究 B (課題番号 20320072) 研究成果.